

平成29年度会長賞全国1位は、

原田弘鳩舎

つくばね連盟
常陸石岡連合会

作翔の「16HS00121」に決定!

グロンドラースを基礎にした飛び筋で
歴代最小数入賞率を更新!

78年に創設された笹川銘鳩賞の流れを汲む「会長賞」は、Rg、地区Nのアベレージを競う、中距離のエースピジョン賞タイトルだ。連盟を対象に2レースの合計順位が最も低いレーサーが顕彰され、13年から全連盟のトップを決める「全国1位」というカテゴリーが誕生。翌年の14年からは順位制から入賞率制に変更され、現在

に至る。

さて平成29年度の会長賞全国1位には、レース歴50年の大ベテラン・原田弘鳩舎(つくばね・常陸石岡)作翔の「16HS00121」が選出された。16年の5月24日に生まれたこのメスは、Rg、地区Nの2レースで総合優勝という離れ業を演出。第1回目の会長賞全国1位に輝いた「アイアンレディ」以来「キセキの翔歴」での受賞である。結果、叩き出された入賞率——「0・000180」

は歴代最小!ここに新たな超銘鳩が誕生した。

ヒロインは、原田鳩舎の代表鳩である東日本稚内GN総合5位鳩の孫である。母方祖母であるこの超長距離チャンプの父親は、「石狩系」というオリジナルライン。この名称は今シーズン後に付けられたもので、そもそも同鳩舎が憧れていたというレースマン・小松崎賢一鳩舎が、自身の900K、1000Kダブル優勝鳩「石狩クイン(シオン系)」のライン化に成功した暁につけようとしたものだったという。

「小松崎さんは残念ながら確立にまで至りませんでした。しかし私は密かに自分の系統ができたこの名前をつけようと決めていましたね。総合優勝というよりAPをテーマに鳩作りをしてきたもので、昨年はKBD B会長賞北関東地区1位、今年はRg、地区Nダブル総合優勝鳩が同じ系統から生まれたことでこの筋に自信がつけました。オリジンは「石狩クイン」ではありませんが、自分の系統に思い切って「石狩系」と名付けたんです」。

大元は30年以上にわたって師事

をしている池田将二鳩舎(市川南)から導入してきたグロンドラース系。ヤンセン作「シャトロ」の孫鳩「ジッター」やホフケンス系を基点とする「シュテルテブラウエ」などの直仔、孫鳩をベースにコロニー化を図ってきたものだ。源鳩は30羽ほどになるが、現在の基点は前述の「シュテルテブラウエ」の近親鳩にして、グロンドラース系の粹を集めた「石狩2号」こと「05HA08801」。この1羽は、06年の記録率1%台となった東日本C Hで連盟優勝を果たしたC Hバードで、前述のKBD B会長賞北関東地区1位と東日本稚内GN総合5位鳩はその孫鳩であり、他にも総合優入賞鳩を量産していることから、まさしく現在における原田鳩舎の核である。

長距離系で固められた
今年の中距離ナンバーワン!

オリジナルラインに加えてもう1本、原田鳩舎の主力系統が会長賞全国1位鳩に流れている。それは巨匠岩田誠三氏が確立した「岩田系」で、元はグロンドラースと相性が良いと言われて導入した異血の1つだったが、余りにも活躍



作翔者・原田弘鳩舎のプロフィール
レース歴/50年
鳩舎規模/種鳩5坪70羽 選手鳩3坪60羽
主力系統/石狩系、岩田系
代表翔歴/平成28年度KBD B会長賞・北関東地区1位
13年東日本稚内GN総合5位

16HS00121 “石狩マスト号”

B ♀ 原田弘鳩舎作翔

年	レース名	実距離	参加羽数	成績	入賞率
17年春	つくばね連盟Rg	494.077K	1,532羽	総合優勝	0.00065
	つくばね連盟地区N	704.956K	870羽	総合優勝	0.00115

合計入賞率：0.00180

※平成29年度オランダ伝書鳩協会会長賞・北関東地区優勝

- ▶ 11HS13350 B 原田弘作
- ▶ 99SA15878 B 岩田誠三作
“岩田GP”全兄弟×“105085号”の孫
孫/東日本CH、東日本稚内GN入賞
- ▶ 06HR01429 B 原田作翔 700K 2回後種鳩
岩田作×プリンクマン作(リモージュN優勝“プリンキーボーイ”の娘)
- ▶ 14HL02651 B 池田・原田共同作
- ▶ 05LH06857 B 山室強一作翔
07年東日本稚内GN総合4位・西千葉連盟優勝
4分の3パンデンブッシュ×(D&マタイス×パンデンブッシュ)
孫/GP800K総合3位他
- ▶ “シスター石狩号” 11HS12753 B 原田作翔
13年東日本稚内GN総合5位
グロンドラース(石狩系基礎鳩“石狩2号”の直仔)×モスキート
16年KBDB会長賞北関東地区1位の従兄弟



鳩を生み出すため、いつしか支柱を担うようにまでなったとの由。受賞鳩の父方祖父にあたる「99SA15878」は、まさにその基礎鳩的存在で、しかも思惑通り、本筋——グロンドラース系との融合によって、ヒロインは作られていた。

「あくまでウチの場合ですが、この組み合わせは分速1500メートル台のレースに強いんですよ」。

Rgはまさにその展開だった。優勝分速は1520メートル。見事にハマったというのが原田鳩舎の感想である。

対して地区Nは、当日帰還8羽の超耐久戦となった。もともとこのトリは海越えまで使うと決めていたため、より距離の長いGPではなく地区Nにエントリーしたものの、前戦で総合優勝したということ——成績のピークを迎えたこともあり、正直帰還さえ厳しいと思っていた。

しかし受賞鳩に流れる血をみると、前述の岩田系然り、オランダの最遠距離地帯に鳩舎を構えるプリンクマンのマラトンチャンプ「プリンキーボーイ」(ネリモージュN優勝)、パンデンブッシュとデズメット&マタイス、デルパールで作られた東日本稚内GN総合4位鳩「05LH06857」にモスキート系と、受賞鳩の8分の7以上が長距離系である。むしろ耐久戦に強い血統構成であり、原田鳩舎も「900K」1000Kを意識して作出を行ったとの由。鳩レースはブラッドスポーツという観点からこのトリが総合優勝したとしても決しておかしくない。固体としても筋肉は柔らかく、性格はおとなしい上、自分のテリトリーを崩さないまさに長距離タイプであった。

果たして今回の全国1位は、歴代の受賞鳩に比べて長距離色が強い。しかし能力としては王道——展開不問のレーサーが、やはり「中距離ナンバーワン」の称号を得た。

←主翼をみると10枚中6枚が換羽残し、である。

